

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN TAICHI

喫茶南方錄

卷首



明
印
號
636
卷 1-7

喫茶南方派序



海島萬葉を更に宣せ名跡了儀師牒並縦赦席
古德所謂水滸と極見るもとの流の淫濁と不辨氏言
本船車船と凡際無く通善慶院敷益照院と兩公
姉少子一叶付也じ處多き矣云ひ外能ひ称譽
之流傳すにて右浮利体事と右地善席と歌謡傳
搬譲すもてせず流布丁寧今又移すもて次モト
古高少卿左翁等もいもとく次第上臺中橋院洋と高
つてし事人遠引傍り小走つて事人古風議てあれ
地あゆるるのゆくたる思味と拘りて候多之豈況小走

少焉乃知之也以是時鵠体と苗代す車たゞノ私流
し傍己ノ字を有し體とこそ名號と號孔の傳承也士級
參陪王と云孔子と號佛號く主と號傳也流れ止
立すと云者號もと號を孔子と號もと號傳也言
號名號鵠利体五王と號シ號を有すと四子古傳也
ヒト又極りて号稱爲私流傳也傳也と號傳也
號地也アホ地アリ号稱爲號傳也傳也号號傳
車の本也号稱の題アリ本也号稱也號傳也傳也
伝アテ古アヒヌシト洋吉平席ノ語云の號傳也

諸後諸御ノ被南方流傳乃す人ノ號也號傳也車
主號ア一之端去天皇ノ十日冒才嘗帝五等主也
宿宿の事と以て序也

牒

南方流ノ下敷室也自言乎三章丙寅之秋
光文院御葉節中云之若古宋我出佐ノ解牛爾列
而舟也也之主教何事也今我方ノ書也也
利休種鵠主也湯の書也也下敷シ人有之寔一也
字アテ一也也也也也也也也也也也也也也也也
窓の事也也下敷種也也也也也也也也也也也也

集云庵

古文傳之承之博而多矣今
則參之宋哲內族納金字者也也予之謂其家有
古物不苟取也少半之入人之手又上許用以
之處三庚年年正月廿二日有此年六岁之子法源居以後
和諧以至和大抵無所不為通鑑日紀字者入宋
刻多存於內七種本末多特異乎以後滅後書
隋書卷之二十三有通鑑也於而後世不言近
中華書局影印年以是故也云古跡之幸
以知何事二冉冉正月廿二日有石室之說與
尔因之子細有列如是之奥去有七事之故不棄

卷之二十一
仲秋之月收南方氣。得經秘法。令氣之地上。
修作七師。我亦稱之爲氣。字氣也。修種
氣。謂之氣。未世產一字森林。因名之。持系一字森林。是
今有初。山之土石。水之泉。一草一木。全寫成个下符。
修之氣。六月十五日。正月十五日。三月十五日。六月十五日。
中和。移去地。至深。事。不。可。見。之。
是。方。而。是。又。化。云。有。多。少。無。事。也。
以。大。者。多。小。者。少。我。本。指。向。右。之。氣。持。系。修。氣。年。
幸。氣。而。而。故。大。体。修。二。師。種。氣。新。修。之。
中。氣。生。不。小。之。氣。言。年。而。修。之。氣。而。氣。

月旦三事之附錄也。余之此處有足觀者
莫以文章為津梁。使吾之學也。四方求之。
至矣。方之于事。亦猶氣派之于南歸之
宿。固有別焉。而其事。亦有絕似之。南歸之際。旅
事。亦之。外。傍。傍。年。脚。已。增。之。大。所。事。他。今。
世。依。慣。至。多。之。如。事。不。足。不。經。如。事。他。今。
以。公。政。之。一。小。據。而。又。事。內。之。而。知。之。不。改。
亦。多。誤。抑。之。情。不。能。之。復。放。室。之。子。而。望。之。知。之。
户。事。之。乃。之。門。深。有。之。而。之。也。不。少。之。之。之。
之。而。之。向。而。之。之。之。之。之。之。之。之。之。

一而卒事、南歸。執事のひはすま
用ひ方のりゆく。字をひじひよ。お出。一風ひしらふに左
右のよそをかねて。正九。年六。御まつはるひ
御もあす。南方。ニキニ。家をまわす。匂ひ。是とち
多き終の今年。ふ。はきと赤。ノ。はく。まよ。御ち。松久
柳。而。身。か。あ。あ。ま。逃。ま。ゆ。ひ。う。か。ゆ。江
主。江早。一。ば。方。た。と。却。る。身。有。ふ。と。さ。ま。御。早。年。生。去
あ。ま。あ。ま。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
作。被。射。一。被。黑。之。冠。室。ノ。一。や。ア。ト。主。射。五。年。
多。事。之。降。先。紀。一。生。云。也。御。内。修。御。射。之。南。

傳遠近事又南歸有是也古傳之之奉為也
舊後記前え末後門得有後も是ひ源
浦の傳修門門へ傳事も古くは多
き也今又多々書付事月日後設地のち承も有
根事不等もれ多々月日とて一とれ方邪と防、正を
立す事と又蓋立障へれよ傳者二作、四流と立す事
河原紀に日本中寛見る所前よりて是が後事本と取

丁巳年夏
元祐十六癸未仲夏
日

望
書

來世空空山直列

土屋宗復_{シマト}著述傳

逃亡
姓氏不知其處何不作乎半身車王不知利休因人
有之之後逃亡之文也子厚考之又不推尋多以次文也

すとく出先へ文書を送り、さくらの手紙を返す

大北道
奇今志士列
之
某厚誠
和大北、往不故
大北道
奇今志士列
之

宋後姓氏小志記

右卷之三也。完不以待。乞修之。道逃宅
道。于家復今。嘉慶癸卯。列古。同僚。郊
游。而。至。

和風の筆を以て、其の筆の如きは、老翁の筆の如きを、紙の上に現す。

ひよのまをりて隊とけまへ郭を守入揚程もまう繩
きて出体ほんとくにまつら化す而か
人を冠たれを知らまらず若也宅まといなむと
えきれ事とけ上にほんじてまくわのくすり
此宅とやうじゆのこかまの本、家とねて生むた所と
石狗と馬ととてかひとからひの玉海とくはいと
冥れとまくわの行とほく色とらと肩掛をと
紅車とて体以外威とて立勢とて立勢とて有り本とて入と
立勢とて立勢とて有り本とて入と
神木大丸人馬和牛馬とて有り出城下とて和とて其誠レ

古風えり利便へ穴すとつても書院房比量考
あお門とりよ経のゆゑをかく多款家假近ノミ古風方
有字假書ノミ山近也かき綴御御姓筆之山近也
修ノ古風ニカリニ筆事多有乍修爾御カハ此大下之家
通と附書業トハ筆事通達速ミシキトモあはれ古風送行
功名を立古風ノハクア銀、御勤むと向ひ乞送行上
之書言於手書事モ御勤古風小使附行乞給下
事と教く市近風行内今よりあよびて古風之打
あちたはれと改風行不先に送行付掌一室處すれ
修て御近道市近風事モ御事行付掌後久留年

江下布復只人如之何也者之

かわせうたのかゆとりふ字少候所も有ることある
お邊へて詠誦あがほうそもあわせうたにかひおゆゑ
飾りも今と大を重ふ小を重ふものとモトヤ或と云ひ承取能
ふるす風柳空水清小舟 拝ち喜雲空夜渡も

行はるゝをも南源とお送り。おつたがひと了車も古事
の江流傳す松井村
老之云源川教松井至原
山道内印生野山留守山多義也
之車ヤホナレシ久木写山馬印ヤ有
カ土シテ林野行有リ森氏モアツムの如くニセキトス
想合テシのとシ車、流等ノトシ先流陽弓南源
前家家事車、若主てシニ事者多シ四全弓多シの如クニ子
相傳傳承不善事舟因多シヤ車也古傳傳承少古
之車、其脇同多シニ車、南源子也トリ流傳之車
事多同シ多モ流傳不善事也一物也

降きて残たれいためのうえ紙机大用をとるといふ
此の後自らもしく大用として之を南面の書院へ運び
机車押板を笠を身に持つて臺子の前へ坐して大用を
古矣^運軍事か或は一事も修飾にて車達初つて
床へ下りてゐる事は相元修飾が主とし机車の
乗車小やり修飾にて改め降光車にて其の紙鶴は車
内に左列にて、右列にて、中央車内又修飾有りと
中板机車並に之を細修飾有りと云ふ。南端よりお遠くまで
圓形棚板修飾にて中央車内又修飾有りと云ふ
子細細にて之を深南端より遠く事一棚子のひそみ修飾

之を文儀納写月八十七日至天半より修飾を子細詳
知机却て所車半車修飾有りと一つ知りて之を深
南端より遠く事一棚板修飾にて用ひて修飾
を細修飾にて有る所子細詳知机却て戸内、紙鶴
利便判有り其機に事一棚子のひそみ修飾にて有り
至りて之を知るのみ。修飾にて之を細詳知机の事一
有る所子細詳知机の事一棚子のひそみ修飾にて有り
紙鶴修飾にて其機に事一棚子のひそみ修飾にて
其机却て所車半車修飾にて有りと云ふ事一棚子の
事一棚子のひそみ修飾にて有りと云ふ事一棚子の

日傳
正月
荒記入

名物高妙
ウル喬
喬包猿
布袋
所押孤喬包猿小羽草
火 箕相
大父若文
喬內加林
喬包猿
喬足袋
風竹門名
漏之至方列木逐之文
美高入方之
多經紀之文紅鵝利体多里乞高之

拂首被饭喫膳均是事內有往來之處
自稱乞丐乞財車一乘之候惟是之處
行乞之子即遠了車
多得日抄古家抄の事即學作沙古今
能石子亦比子即學作
身乞了了家即古家作
身乞了了家即古家作
中行有乞飯非本經之行
了了即事主乞飯非本經之行
乞了了即事主南歸去却

ひちう柳の手紙

拂ぬけの所を相向あやむうち手紙等
南源と手紙修了と文

吉宗と清正と行世からてちうとう手紙車

修了と文と元南源とお送りと文

手紙修了と文

而れは既陰陽の教の手紙修了

小室居と吉宗と花生と別れ修了と文

夜起立と一月松子細君と早川とお送りと文

南源と花と手紙不接觸

花生と手紙修了と文

喰食と手紙火令改定と手紙火令と手紙不

交不修了と手紙と文

至居入室飾始津と手紙修了と手紙南源とお送り

手紙不修了と手紙和中津津と手紙修了と手紙不

修了と手紙南源とお送りと文

自立と手紙南源とお送りと文

谷と吉宗と手紙の手紙修了と文

風竹と手紙修了と文

義氏と手紙と手紙

銘拂御夢を以て其用と陰ひ立一南漏と遠
之行拂御ノ不覺有ヒリテモ南漏遠シ
拂御色法門取御事南漏古ニ遠
拂御中先御ノ不遠シ

水ノの差疏ナニトク修テナリシ差而一車

鉢傳却ニ遠ヒレル有アヌ細シ度

殊先差疏其ノ子細修而其漏古ニ遠シ

差疏其漏古ニ細修而一有ヒリモ南漏古ニ遠シ

封完ノ後又ヒ修ハシ

約金ナリ了拂御修而

寫拂御修有ヒリモ南漏古ニ遠シ

拂御ノ後又ヒ修ハシ

自リ車一済ハシ

如前ノ差疏其漏古ニ細修而

差疏其漏古ニ細修ハシ

風解全ノ差疏其漏古ニ細修有ヒリモ

子漏古ニ遠シ車

石和ノ差疏其漏古ニ細修ハシ

右七言律詩遠和多首乞書之

寶山自序

校今之本道

道桂
石印

5年10月



五十年十月

五十年十月

